

日本では、イタリアのことがよく知られて
いるように思われているが、その本質を本当
には分かっていないのではないだろうか。そ
んな現状を憂えて両国の交流の懸け橋になろ
うと力を注いでいる、県日伊協会の仕掛け人
で副会長、白馬村在住のイタリア人、レオ・
ベリーニさん(40)に話を聞いた。

(シルビー・ジャコニ本紙特約記者)

彼が来日したきっかけは、ローマでの妻、緑さんとの出会いだった。結婚を
決意し、九一年に日本へ渡

った。「日本に旅行するこ
とさえ、夢にも思っていな
かったんだけど」という。
もともとホテル業関係の
仕事をしていたレオさん。
白馬村にある緑さんの実家
が営むペンションでシェフ
として腕を振るう傍ら、長
野市や松本市などでイタリ

ア語を教えている。
九三年にイタリア・ミラ
ノの服飾専門学校と姉妹校
提携を結んだ松本市の松本

衣デザイン専門学校で、二
〇〇〇年ごろからレオさん
がイタリア語を教えるよう
になったのが協会設立の伏
線になった。昨年九月の「日
本におけるイタリア年」で
同校が行ったイベントを見
り、現地でアパートを借り
たりする手続きの応援もす
る。「単なる友好団体には
とどめたくない」と、本気
で交流を広げる熱意が伝わ
る。

来日から十一年。「やっ
つたほか、今年から本格的
に例会やインターネットでの
情報提供など活動を始め
た。大使館との人脈を生か
し、イタリアに留学したい
時の申請手続きを手伝った
り、現地でアパートを借り
たりする手続きの応援もす
る。「単なる友好団体には
とどめたくない」と、本気
で交流を広げる熱意が伝わ
る。

「県日伊協会」県内在住でイ
タリアに興味のある人、友好を
深めたい人なら、誰でも入会で
きる。入会費500円。例会や
情報提供のほか、イタリア留学
など実務的な相談も行う。クリ
スマスを前に、交流会も予定し
ている。問い合わせはロッシ田
中館(☎0261・75・213
1)へ。

真の交流を広げる熱意



長野市内から自宅に来た受講生に丁寧にイタリア語やイタリア文化を教えるレオ・ベリーニさん

と()まで来たという感じ
ですね。日本の日常生活に
慣れるまで、歳月を要した
し、落ち込んだ時もあった
と振り返る。もともと
「もう過去のことだから触
れたくない」という返事。
よほど、つらい日々もあっ
たのだろうと推測できた。
取材を重ね緊張感が緩ん
だころ、一つのエピソード
を紹介してもらった。ボラ
ンティアで国際交流イベン
トにかかわった時のこと
だ。「仕事と比べると、イ

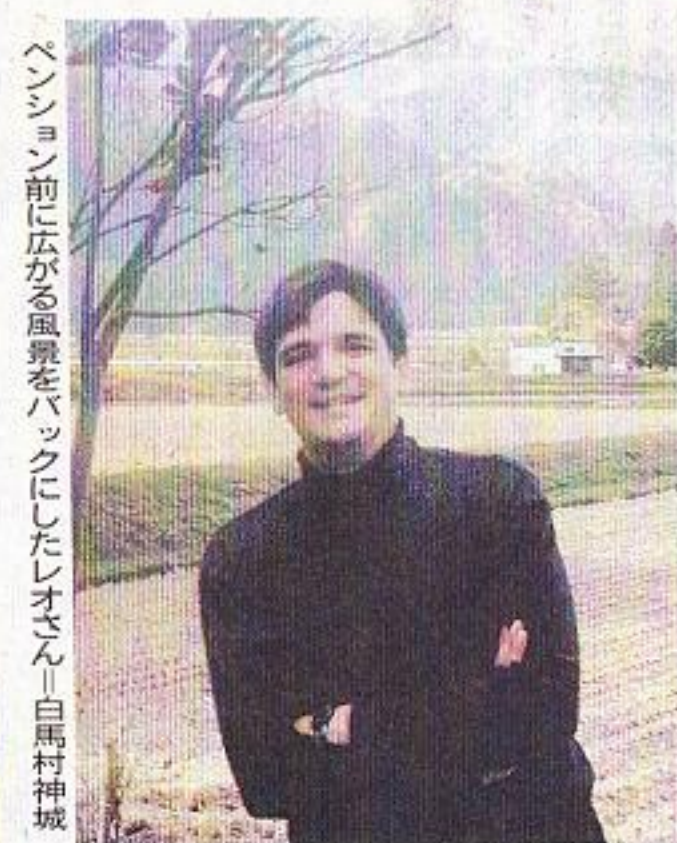
文化伝え「根っこ見せたい」

「語学も、有名なイタリ
ア人タレントのように、面
白おかしく教えるだろうと
初めて受講に来た人の多く
は思い込んでいる。でも、
私はあくまでまじめに、日
常会話の他に文法や文書の
構造などをしっかりと授業
の基本にしている」と話す。

また、言葉を教えること
によって「イタリアは、パ
スタとサッカーだけではな
い。文化をより深く理解し
てもらいたい」と期待して
いる。そのために、彼は観
光名所の紹介よりも、イタ
リア各地の異なる文化、生
活スタイルやイタリアの家
族構成などに重点を置いて
教えている。

「これからは、協会を通じ
て「一層身近なイタリア」
を伝え、ペンションの客や
受講生との触れ合いの中で
感じたイタリアについての
偏りを克服したいとする。
また、会のメンバー自身が
「自分のイタリア」をつか
んで、自発的に体験を交換
し合う場になりたい、と希望
を抱いている。

ちよつと悲観的に聞こえ
るが、それは、レオさんが
育った環境と日本の社会の
違いのせいだ。「イタリア
人はよく友達同士で出か
け、自分の悩みを打ち明け
たりする。しかし、日本で
は相手とかなり親密になら
ない限り表面的な会話しか
できない」と、日本におけ
る「コミュニケーションの貧
しさに不満が隠せない。だ
からこそ、協会を通して真
の交流を図りたいのだろう
と思った。



ペンション前に広がる風景をバックにしたレオさん(白馬村神城)

最後に「私はイタリアの
花を見せるよりも、根っこ
を見せたい」という彼の一言
はとても印象的だった。
レオさんは大都会で暮らす
外国人と一味違う雰囲気
を持ち主だ。日本の地域社会
に溶け込みながら、イタリ
アの素顔も伝えようとする
、奥深い人柄をほつつか
つとさせた。

Ces liens qui tissent des liens entre Naganu et le monde.